

第12回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 加藤 純章

名古屋大学大学院教授

第12回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員長 前田専學（東方研究会常務理事）

2002年10月10日インド大使館

審査委員会における選考経過をご報告し、併せて授賞理由を申し述べさせていただきます。

さて、本日10月10日は、中村元初代理事長の三年忌に当たります。財団法人東方研究会では、昭和54(1979)年以来、インド大使館と共同主催で、学術及び文化活動のすぐれた業績を世に広く顕彰するために、「東方学術賞」を断続的に授与して参りました。昨年の三回忌の折りには、中村元先生の三回忌の記念の事業の一環として、その「東方学術賞」という名称の頭に中村元先生のお名前を冠し、「中村元東方学術賞」と改め、4年振りに復活させ、第一回目の「中村元東方学術賞」を、上村勝彦東京大学教授と立川武蔵国立民俗学博物館教授のお二人に差し上げました。

今回授賞者を選考した「中村元東方学術賞」審査委員会は、つぎの10名の委員から構成されております。アイウエオ順で申しますと、奥田清明四天王寺教学研究所長、川崎信定東洋大学教授、木村清孝鶴見大学教授、三枝充恵筑波大学名誉教授、高崎直道鶴見大学学長、田辺和子名古屋大学講師、田村晃祐東洋大学名誉教授、奈良康明駒沢大学名誉教授、原実日本学士院会員、それに委員長の私前田専學でございます。

これらの委員の先生方の他に、過去11回にわたりまして東方学術賞を受賞された方々にも、「中村元東方学術賞」に相応しい功績のある研究者の推薦方をお願いし、それらのご意見が出揃った去る7月15日(月)、神田明神の一室を借りまして、中村元東方学術賞選考委員会を開催致しました。諸先生から推薦された研究者は、10名に及び、推薦された研究者は、それぞれにすぐれた業績を挙げられており、選定は困難を極めました。慎重審議の結果、皆様にご報告申し上げましたように、第2回目の中村元東方学術賞、従来の東方学術賞と合わせますと、通算第12回目の中村元東方学術賞を

加藤純章名古屋大学大学院文学研究科教授（昭和14年生）
に差し上げることに決定致しました。

さて、加藤純章博士への授賞の理由を申し上げたいと思います。

加藤純章博士は、昭和38年4月、東京大学大学院人文科学研究科修士課程に入学されて以来、一貫して経量部（Sautrāntika）を中心とする部派仏教の研究に従事してこられた、地味な篤学の士であります。

経量部という部派は、一般には、上座部（Sthaviravādin）系統の説一切有部（Sarvāstivādin）から分かれた最後の分派といわれております。『俱舍論』（*Abhidharmakośabhāṣya*）では、説一切有部と対立する見解をもつ部派として取り上げられ、また『俱舍論』の著者である世親自身もこの部派に属しているとされております。しかし確実にこの派に属する文献も存在せず、その部派の実態については、中国の玄奘らが伝えているもの以外には、ほとんど何も知られておりませんでした。

加藤純章博士は、故平川彰東大名誉教授の指導の許に、『順正理論』（*Abhidharma-nyāyānusārisāstra*）における上座（Sthavira）の研究」をテーマに研究を開始されました。東京大学大学院の博士課程に進学されて後、ベルギーへ留学して、『大智度論』（*Mahāprajñā-pāramitopadeśasāstra*）の翻訳で著名な仏教研究の碩学ラモット（Étienne Lamotte）教授の許でヨーロッパ風の方法論を体得されました。

帰国後、博士は二松学舎大学で教鞭を執られるかたわら、経量部の研究に没頭されました。先に触れました『俱舍論』と『順正理論』に見られる、経量部についての言及を主たる資料とし、併せて『大毘婆沙論』（*Abhidharmamahāvibhāṣasāstra*）その他の関連ある言及をも取り上げ、いちいち資料的に綿密な検討を加えながら研究し、経量部の歴史と教理を再構成し、折に触れてその結果を公表されました。そして最終的にその成果を『経量部の研究』と題する一書にまとめて、東京大学に学位請求論文として提出され、昭和62年3月に文学博士の学位を取得されました。この学位請求論文は、その後さらに改訂の手を加えられて、平成元年に春秋社から、『経量部の研究』として公刊されました。

博士は、この研究で、経量部に関する数多くの新たな知見を提出されましたが、中でも学界への顕著な貢献は、以下の二点を初めて明らかにされたこととあります。

(1) Sautrāntika, すなわち「経量部」は、『俱舍論』では「経(sūtra)を知識根拠となし、論(abhidharma)を知識根拠となすにあらず」と説明されているが、この名称は『順正理論』で「上座」という称号で言及されるシュリーラータ(Śrīlāta)が初めて用いたものである。これは『異部宗輪論』

(*Samayabhedoparacanacakra*)などで言及され、パーリ文献で *suttanta-vāda* と呼ばれる「経部」とは別のものである。経量部は、部派ではなく、一種の学派というべきもので、しかも後世には説一切有部の「三世実有説」に反対するものというだけで、そのように呼ばれた可能性がある。

(2) シュリーラータの思想の中核、すなわち経量部の基本説は、感覚器官(根)と対象(境)とが最初の瞬間(刹那)に生じ、認識(識)は次の瞬間に生ずるから、認識はつねに過去の対象しか捉えられない、という主張にある。すなわち認識の対象は、つねに非存在である、という立場(現在有体、過未無体説)から、説一切有部の三世実有説を否定することに努力することにあつた。

以上の2点は、博士の著書『経量部の研究』中の「経量部の歴史」と「経量部の思想」という二章の、それぞれの結論あるいは要約と見ることが出来ます。

その他、『経量部の研究』中の第1章では、『俱舍論』の詩節の中の‘kila’ (伝えらく) という語が用いられているのは、説一切有部説に対する世親の不信を示しているが、そのほとんど(8中7) 経量部説であることが明らかにされた点や、さらには「比喻者」という語は、『大毘婆沙論』では、経量部の先駆と見られる説を説いているが、世親はそれをからかい気味に使っている、などの指摘も注目すべきものであります。

第2章は、「シュリーラータの思想を中心に」という副題を付しており、『順正理論』のシュリーラータ説を基本にして、説一切有部との相違点を論じておられます。その中で、シュリーラータが「存在の要素は、現在の一瞬だけ実在し、過去・未来には存在しない」という説(現在有体、過未無体説)にもとづく認識の構造において、瑜伽行派(Yogācāra) アーラヤ識(ālayavijñāna)に近い

「随界」の存在を主張していること、それと世親の「種子説」(bija) や「相續轉變差別説」(saṃtatipariṇāma-viśeṣa) とのつながりの指摘、「色心互薫説」に見られる『成実論』(*Tattvasiddhiśāstra*) とのつながりの指摘などは、とくに重要であります。なお世親は、経量部に属していることを自認しているとはいえ、必ずしもシュリーラータに従っているわけではない、という指摘もされております。

博士は、この経量部の研究全体にわたってテキストを緻密に読み、公平に判断

した上で、慎重に結論を出すという態度に終始しておられます。しかもその叙述は明解であります。

博士の研究は、以上述べたような諸点において優れており、斯学の最高の水準にあるものと評価されます。このように従来未開拓であった経量部を中心とする博士の多年にわたる部派仏教の着実な研究とその輝かしい成果は、斯学に対する大きな貢献であり、中村元東方学術賞にまことに相応しい業績であると判断されます。

以上が、審査委員会の経過報告と授賞理由であります。